

世界会議 9月16日

■ 開会式

開会挨拶 ダイアン・ダラスIWA会長 小池百合子東京都知事
皇太子殿下おことば
挨拶

■ ウェルカムレセプション

■ 水団連フォーラム 強靱とは何か？—日本の知見と技術を世界に—

■ 関連イベント等

IWAフェロー会議
開会式に花を添えた和太鼓パフォーマンス
IWAコンGRESバッグの中身は？
“May I help you?” フロアコンシェルジュにご相談を



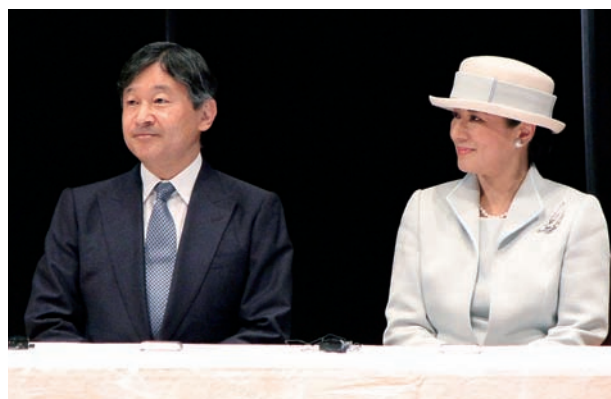


開会式

■ 皇太子同妃両殿下がご臨席

日本初開催となる2018年第11回国際水協会（IWA）世界会議・展示会の開会式が東京ビッグサイトで行われた。皇太子同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、会場には、国内外から水分野の関係者が集まり、水の祭典の幕開けを祝った。

IWAのカラニシー・バイラバムーシー専務理事の司会で始まった式典は、ダイアン・ダラス会長の挨拶に続き、開催都市から小池百合子東京都知事が歓迎の言葉を述べた。また、皇太子殿下からおことばを賜った後、石井啓一国土交通大臣、中川雅治環境大臣、高木美智代厚生労働副大臣、大串正樹経済産業大臣政務官が登壇し、国内外で水問題への関心が高まる中で、会議の成果に期待を寄せた。海外からは、次回の世界会議開催国であるデンマークのヤコブ・エレマン・イエンセン環境食糧大臣が挨拶に立った。



▲総司会を務めたバイラバムーシー専務理事



IWA会長
ダイアン・ダラス氏

今日、われわれが直面する世界的な課題の一つが水問題。数十億人が安全な上下水道にアクセスできず、非衛生的な環境で生活している。また、アントニオ・グテーレス国連事務総長は世界に向けて、気候変動に対する状況は待ったなしの危機的状況だと警告を発しているが、「水」は気候変動における重要な要素だ。今年1月の世界経済フォーラムのグローバルリスク報告書でも、「水」は重大なリスクとされている。2カ月前の持続可能な開発に関するハイレベル政治フォーラムではSDGs目標6の達成に向けた軌道には乗っていないとされた。世界は水問題の解決策を必要としている。われわれは水の専門家として対策を示すことができる。特にIWA会員はさまざまな分野、大陸にまたがり、横断的な力でもって取り組むことができる。水を賢く管理していくために協力しなければならない。今回のIWA世界会議・展示会の開催都市東京は世界有数の大都市であり、水管理を成功させる上で多くの示唆を与えてくれる。技術的交流に加え、日本の「和」を見いだす機会にさせていただきたい。「和」は水管理が必要とする資質であり、東京会議が「和」をもって実りあるものとなることを期待する。



東京都知事
小池百合子氏

東京でIWA世界会議・展示会が初めて開かれることを開催都市の首長として嬉しく思う。水は国家や都市の形成、人々の生活に不可欠であると同時に、災害をもたらすものでもある。7年前の東日本大震災による津波や今夏襲った平成30年7月豪雨は未だわれわれの記憶に新しい。これら災害のほか、高度成長期の急激な水需要の増加や水質汚濁など、東京都はこれまで幾多の困難に立ち向かう中で培ってきた技術や経験を活かし、おいしい水の安定供給や下水道の普及による生活環境の改善に取り組み、強靱な上下水道を築いてきた。世界はさまざまな水問題に直面しており、かつての東京と同じ課題を抱える国は少なくない。それらの国に対して東京が助けになること、東京が学べることがたくさんあると確信している。本会議は、水の最新の知見が共有され、世界の水問題の解決に寄与する絶好の機会。また、今年は「江戸」が「東京」に改称されて150周年の節目の年。東京は先人たちから受け継がれてきた伝統と新しいものが一体となったまちで、2019年のラグビーW杯、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて今まさに力強い歩みを進めている。ぜひ会議参加者の皆さまには東京の魅力を肌で感じてほしい。本会議の成功を祈念する。



皇太子殿下 おことば

挨拶に先立ち、この度の平成30年北海道胆振東部地震により亡くなられた方々に心から哀悼の意を表しますとともに、御遺族と被災された方々にお見舞いを申し上げます。

2018年第11回国際水協会世界会議・展示会が、世界各国から多くの参加者を迎え、ここ東京において開催されることを誠に喜ばしく思います。

国際水協会が世界における安定的かつ安全な水の供給と公衆衛生に寄与することを目的として、長年活動が続けられていることは、大変意義深いものと考えます。

水は、全ての地域や国々において、人々の生活の安定と社会の発展のために欠かさないものです。しかし、世界には、いまだに安全な水や適切な衛生施設にアクセスできない人々が多数存在しています。

こうした中、2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標」において、「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。」が独立した課題として位置付けられました。

「持続可能な開発目標」では、水の問題が、貧困や、教育、ジェンダーの問題など、他の目標に密接に関連した横断的課題としても捉えられており、誰一人取り残さない社会の実現に向けた国際社会の大きな課題となっております。

また、水は、あらゆる生命の根源であり、多くの

恵みを与えてくれる一方で、時に大きな災害をもたらし、生命にとっての脅威となります。

我が国でも、今年の7月に西日本を中心に発生した豪雨災害により、多くの人命が失われるとともに、く道施設の被害によって多くの世帯で断水が発生しました。南アフリカのケープタウンでは、近年の連続した干ばつにより、給水量が厳しく制限され、人々の生活に深刻な影響を及ぼすなど、水関連災害への対応も国際社会が取り組むべき重要な課題です。

私はこれまで、世界水フォーラムや国連水と災害に関する特別会合における講演などを通じて、人と水との関わり方について思いを巡らせてきました。日本を始め世界各国・地域の過去の経験や優れた事例から学ぶとともに、社会における水との関わりの歴史や文化を深く知ることは、水問題解決に大きく資するものと考えています。

歴史から学んだ知恵と、現代の優れた技術を併せて活用し、国際社会が連携して行動することが求められております。

この国際水協会世界会議・展示会で、世界の水問題の解決に向け、活発な議論が行われるとともに、水を通じた人類の繁栄、幸福の実現に向けて、関係者の皆さんが継続して力を合わせていくことを願い、私の挨拶といたします。



石井啓一 国土交通大臣

安全な水の供給と適切な衛生施設へのアクセスは依然として全世界共通の課題。水環境問題が顕在化する地域においては、ハード整備だけではなく人材育成や法整備などソフト面を含めて、汚水管理の主流化を図ることが今こそ重要。本会議で最新の知見を共有し、活発な意見交換により議論を深め、解決に向けた行動につながることに期待したい。



中川雅治 環境大臣

日本はかつて水質汚濁が急速に進行し深刻な公害に見舞われたが、国による法制度整備や民間企業の水処理技術の開発などの対策を講じ、これを克服してきた。一方で、閉鎖性水域の水環境改善、気候変動への適応策など、新たな課題への対応を求められている。環境省では制度面に加え、技術による支援を通じ、アジア地域を中心とした水環境問題に取り組んでいく。



高木美智代 厚生労働副大臣

日本では1887年に最初の近代水道が創設され、安全な水質と低い漏水率等、世界トップレベルの水道を構築するに至った。海外からの協力により発展した日本の水道技術やその知見を今度は日本が世界各国に還元しなければならない。近年では水分野の国際協力において世界最大のドナーとなっている。これらを通じてSDGsの達成に貢献していく。



大串正樹 経済産業大臣政務官

日本が磨いてきた技術やノウハウは世界で活用できると確信している。日本の強みは、地域ごとに異なるニーズに対応した技術やノウハウを提供できること。水資源に乏しい地域では再生水技術、コストダウンが求められている国々では漏水管理技術や省エネ水処理が導入されている。日本の民間企業が世界に大きく貢献できるように幅広い支援を行っていく。



丹保憲仁 日本水フォーラム副会長・IWA第2代会長

長年、水、衛生、環境工学の分野に身を置き、IWAの2代目会長を務めた身として今回の東京開催は大変うれしく、慶賀に堪えないことである。

日本水フォーラムは、2003年に京都・滋賀・大阪で水の国際会議・世界水フォーラムが開催されたことを契機に2004年に設立され、アジア太平洋会議では日本水フォーラムを中心として、水問題の解決へ取り組んでいる。SDGsにおいて、水は飢餓、保健・衛生、エネルギー、ジェンダーをはじめとする全ての目標につながる最も重要なテーマである。水は10日に一度の割合で巡ってくる高速循環資源なので、すべて水をベースとして地球は動いている。

水は人間の生命、生活に欠かせないものであるだけでなく、気候変動や自然災害、地球の環境変化にも関わるものだ。課題が山積する中で、水をキーワードとして考えていかねばならない。国連の水の国際行動の10年がこの3月よりスタートした。日本水フォーラムも国内外の関係者と連携し活動を続けていきたい。



古米弘明 IWA世界会議議長

会議のテーマは「Shaping Our Water Future」だが、東日本大震災などを踏まえ、サブテーマは「持続可能性と強靱性のための科学・実践・政策」となっている。SDGs目標6では、「水と衛生」への全ての人々の利用可能性と持続可能な管理を謳っている。一方、目標11「持続可能な都市とコミュニティ」では、持続可能かつ強靱な都市と人間の定住地を目指している。達成には、水環境に対するリスク管理に基づいた安定的な給水、適切な下水処理が必要だ。

水は私たちの生活や社会の繁栄、健全な自然環境の構築に不可欠な要素だ。水の専門家は、水管理の賢明な発展に責任を持ち、知識を統合し、過去の実践

から教訓を学ぶ必要がある。

最高峰の研究成果や最先端の技術、最適な水管理事例などが幅広く紹介される。展示会では、世界トップレベル企業が最新の製品・技術に包括的に触れることができる。生産的で有意義な、われわれ専門家のネットワークにとってより良いプラットフォームとなり、持続的な水管理に貢献できればと考えている。



基調講演

未来学者のルディ・デワール氏が「THE CONCIIOUSNESS of WATER」をテーマに講演。水を通じて社会課題を解決するIoT等の先端技術の活用手法を提案した。



ウェルカムレセプション スポンサー企業挨拶

メタウォーター(株)の中村靖社長は水問題について、世界に同じ問題は無く、万能薬こそ存在しないが、根幹的な差異のない「グローバルな問題」との考えを表明。IWAメンバーが経験してきたあらゆる経験を東京で議論できることに期待を示し「今宵のひと時をお楽しみ頂きたい」とレセプションへの歓迎を述べた。



ウェルカムレセプション

開会式後、ウェルカムレセプションが西展示棟アトリウムで開かれ、鏡開き、リボンカッティングで開会を盛り上げた。鏡開きには古米弘明2018年IWA世界会議議長、中村靖メタウォーター社長、竹村公太郎日本水フォーラム代表理事、小野芳朗日本水環境学会会長、吉田永日本水道協会理事長、岡久宏史日本下水道協会理事長、中嶋正宏東京都水道局長、小山哲司東京都下水道局長、ダイアン・ダラスIWA会長、カラニシー・バイラバムーシーIWA専務理事、トム・モレンコフIWA副会長らが出席。中嶋局長が歓迎のあいさつを述べ、司会の「セーの」のかけ声とともに一斉に樽酒（東京観光財団提供）を割り、小山局長の音頭で乾杯した。

その後、リボンカッティングを行い、展示会のオープンを祝った。リボンカッティングにはデンマークのイェンセン環境食糧大臣らも参加した。その後、ダラス会長、古米議長らは展示会場に入り、各社のブースを視察して回った。ジャパン・パビリオンでは、早速出展者による「おもてなし」が始まった。



水団連フォーラム

強靱とは何か？ —日本の知見と技術を世界に—

IWA世界会議・展示会の開会式に先立ち、日本水道工業団体連合会主催のフォーラム「質の高い日本の上下水道～革新的技術と産官学の取組み～」が東京ビッグサイト会議棟で開かれた。登壇した東京大学大学院の古米弘明教授、厚生労働省の是澤裕二水道課長、国土交通省下水道部の植松龍二下水道事業課長、水団連の宮崎正信専務理事の4人は、国内水インフラの変遷や、その中で技術開発が果たした役割を説明。持続可能で強靱な上下水道システムの構築にはLCCと環境負荷を考慮した技術が必要であること、それを実現した日本の技術は世界の水問題解決に大きく貢献し得ることを発信した。



古米氏



是澤氏



植松氏



宮崎氏

古米教授は、急速な人口増に直面する開発途上国の大都市には経済・社会・環境面で負荷の小さい水インフラが必要であり、そこでは日本の経験と、産官学連携で構築してきた技術が大いに役立つとの考えを提示。また、日本でのサステナブルでレジリエントな水インフラ実現には、統合的な水資源管理(IWRM)、アセットマネジメント、減災対策などのリスクマネジメント、環境への負荷軽減と保全——という四つの挑戦が求められるとした。

また、日本の汚水処理について、主流である標準活性汚泥法による下水道のほか「人口密度が低い地域で有効なオンサイト処理である合併処理浄化槽」「小規模の処理に適したオキシデーションディッチ(OD)法や回分式活性汚泥法」などの技術を挙げ、世界各国・各地域のニーズに応えられる多様性を強調した。

下水汚泥の有効利用については、90年代以降はセメント原料や建設資材としての利用が主流であり、東日本大震災時に放射性物質が再利用の障害と

なった等の経緯に触れつつ、バイオマス利用等の観点も踏まえた再利用の多様化が求められているとした。

植松課長は「日本の下水道」と題し、財政や各種施策など下水道事業の概略を紹介。下水道は公共用水域の環境保全や浸水の防除といった公的な役割と、水洗化による生活利便性の向上といった受益者へのベネフィットという二つの側面があると説明。「公的な役割を踏まえて、下水道事業には国費による補助金が投入されている」と財政状況を解説した。

またオフサイト水処理である下水道だけではなく、オンサイト処理の浄化槽なども合わせて、日本の汚水処理人口普及率は約9割であり「残り1割の未普及を10年で解消していく」と施策の方向性を述べた。

雨水管理については「都市部で浸水リスクが高まりつつある中、雨水貯留管や雨量レーダー、雨水ポンプ、ハザードマップの作成などハード・ソフト両面での総合的な対策を行っている」、下水道が持つ

ポテンシャルについては「消化ガス利活用や固形燃料化、リン回収による肥料化など汚泥有効利用のほか、下水熱による地域冷暖房、処理水の再利用など地域の特性を踏まえた施策を展開している」、アセットマネジメントについては「老朽化による道路陥没も発生しており、管きよの点検・維持管理の効率化が求められている」と主要トピックを紹介。PPP/PFIや技術開発の最新動向にも言及した。

是澤課長は、大多数を占める小規模事業体での職員不足、施設老朽化、災害、料金格差といった山積する課題について説明。自然災害については東日本大震災から西日本豪雨、北海道胆振東部地震にまで言及し、速やかな施設の更新・耐震化は喫緊の問題だとした。これらを解決し、人口減少の中でも事業を持続可能なものとするための方向性として、関係者の取組みを「安全・強靱・持続」の観点から示した新水道ビジョンを紹介した。

宮崎専務理事は、日本の質の高い上下水道システムは「産官学での課題解決と、その過程での人材育成・技術開発の成果だ」と説明。これから本格的な水インフラ整備を進める国では「課題を先取りした



最先端技術の採用が国全体の持続的な発展につながる」とし、日本の主要な技術・製品を紹介した。汚水処理分野では、省スペースかつ高性能であり大腸菌等の高い除去率を誇るMBRの技術開発では日本がトップレベルにあること、工場生産で品質が安定し人口密度の浄化槽が人口密度の低い地域に有効なため輸出が増加していることといったトピックのほか、管更生工法、管内調査用ドローン、先行待機型雨水ポンプ等について言及。クラウドを利用した統合型システムなどのICT導入も広がりつつあるとした。

関連イベント等

IWAフェロー会議

古米氏が名誉フェローに、木村氏を新たに選任

2年に一度開かれるIWA世界会議。国際的にも世界の水のスペシャリストが集う貴重な機会となる。IWAでは、世界会議に合わせ、IWAへの貢献が大きい水のスペシャリスト「フェロー」による会議を開催し、意見交換を行うとともに、新たなフェローを選任する。

現在、日本からは藤井滋穂氏、船水尚行氏、古米弘明氏、伊藤禎彦

氏、松井庸司氏、田中宏明氏、長岡裕氏、滝沢智氏、松井佳彦氏、岡部聡氏がフェローに選任されている。

会議では、古米氏を名誉フェローに、北海道大学の木村克輝教授を新フェローに選任した。

木村教授はIWAの粒子除去のスペシャリストチームの議長を務めてきた。「東京会議で選任を受けたことは幸運。推薦頂いた古米先生をはじめ多くの関係者に感謝する」と語った。

また、同会議にはEY新日本有限責任監査法人がスポンサーとして参画。同法人の福田健一郎氏が、歓迎のあいさつを述べるとともに、日本の上下水道経営の動向を解説した。



▲フェローとなった木村氏(左)

開会式に花を添えた和太鼓パフォーマンス

国際会議場で行われていた開会式の式典のさなか、東京観光財団が提供する和太鼓のパフォーマンスが始まった。会場に突然和太鼓の大きな音が響き、後方にある入口から入場してきた一団に参加者も釘

付けとなった。打ち込み系の打法と早打ちの太鼓、息の合った演舞のアンサンブルで、世界会議・展示会のオープニングに花を添えた。



IWAコンgresバッグの中身は？

IWA世界会議の会議登録者には、会議受付と引き換えに「コンgresバッグ」が渡される。コング



レスバッグにはプログラムブックとともに毎回開催国の「おみやげ」が入っており、バッグの形態・デザインとともに参加者の注目を集める。

東京会議のおみやげはステンレス製の「マイボトル」。会場に6カ所セッティングされた東京水を補給できるTokyowater Drinking Stationのマップとともに配られた。このほか、東京都水道局・下水道局のガイドと東京の紹介冊子、スポンサーからのリーフレットと粗品が同封された。

“May I help you?” フロアコンシェルジュにご相談を

会場となった東京ビッグサイトのあちこちで見かけた白いスタッフジャンパーや水色の市松模様の服を着た人たち。これは、フロアコンシェルジュ・ボランティアの皆さん。初日は開会式にVIPが来場することもあって、会場内も慌ただしく、道案内に大活躍であった。海外からのお客様だけでなく、日本人にも丁寧にご案内。

